No.1

鶴見川流域の板碑
―板碑が語る中世の鶴見川流域―

「石造物に見る柿生地区の中世～近世初期の姿」

中西望介

1. 墓地で見かける青石が板碑――→中世（鎌倉～戦国）に作られた供養塔婆
板碑は土地の年輪　文書史料の少ない地域　中世人の生活・願いの証し
2. いつから造立―盛期―終末―造立の変化
3. 初期板碑の特色
4. 戦国期の結衆板碑からわかること
5. 破片の活用
6. 卒塔婆→塔婆

一、板碑とは

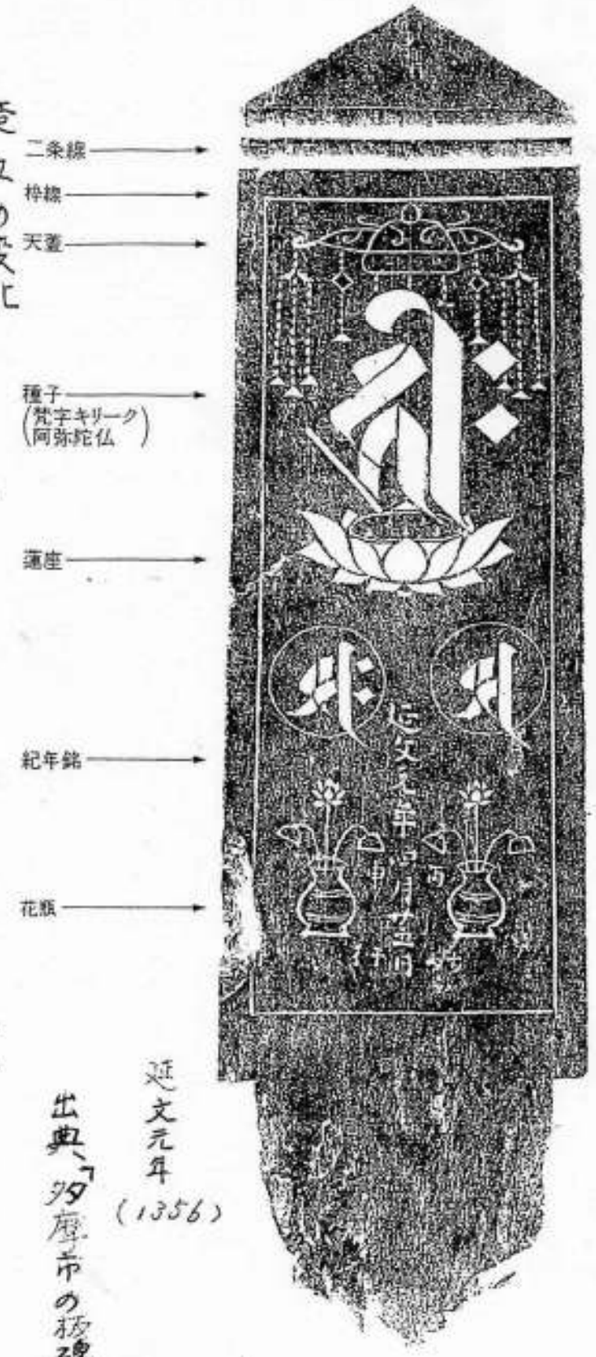
中世の供養塔婆
武蔵型板碑

秩父・小川町の緑泥片岩

供養塔婆

二、造立の変化
旧緑区周辺の板碑

武蔵型板碑の西端



出典「多摩市の板碑」

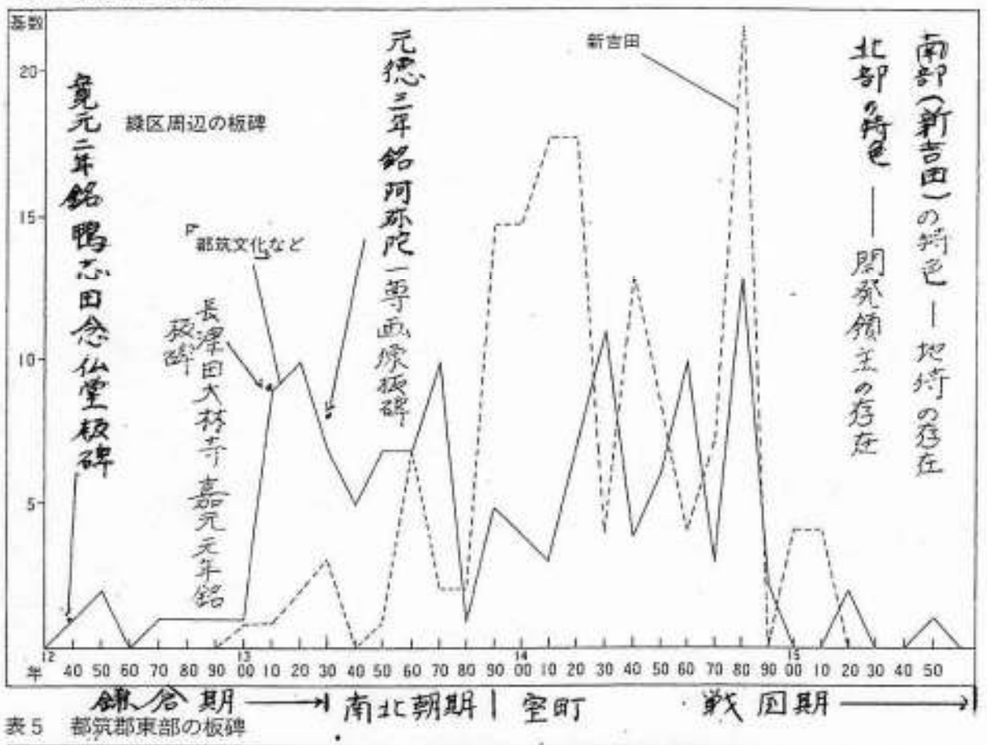
図1　板碑概念図

彫刻のよさ

中流
上流

南部（新吉田）の特色――地侍の存在
北部の特色――開発領主の存在

図38　緑区周辺の板碑



都筑文化2　一九八二、長光寺跡調査研究集録八　一九九一、○寺下遺跡　一九八六、○町田地方史研究　一九九一、二〇〇三

表5　都筑郡東部の板碑

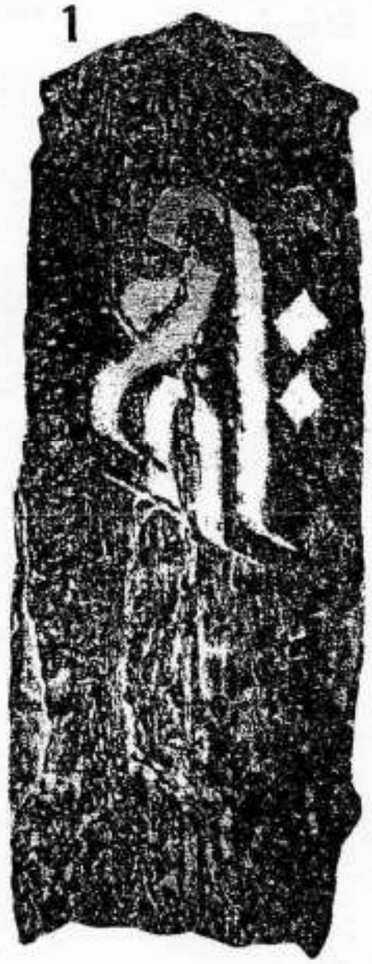
		第一期 13世紀	第二期 14世紀～15世紀前半	第三期 15世紀後半～	不明
紀年銘のあるもの		6	193	71	1
種子	阿弥陀	6	189	65	
経文	観無量寿経	1			
	光明真言				
	画像			2	1
	結衆			3(夜念仏、念仏供養を含む)	
	願目		3	1	
	宝塔		1		
	十仏あるいは十三仏				
法名			6	2	
大きさ（単位 センチ）		(例)寛元二年板碑 高133 横巾42－52	(例)応永期9基の平均値 高62、横巾19	(例)文明期20基の平均値 高53、横巾15.3	
花瓶		なし	ある板碑増加	ある板碑　多	
円相（月輪）		なし	小々あり	多数あり	

緑区史通史編（1993年）　中西執筆
○印その後の発掘等で修正が必要

NO.2

三、鶴見川流域の初期板碑

1



横浜市青葉区鴨志田　念仏堂
寛元二年（一二四三年）
一三二（地上）×五一五
直下から渡美焼壺の蔵骨器
河原石
中世の鴨志田郷・板碑と武士団

2

横浜市青葉区鴨志田　念仏堂
建長七年（一二五五年）
一〇九×五四　上下に刻

面見寺類 ——→ 埼玉県川島町面見寺様式の伝播（磯野治司説）

3

川崎市麻生区岡上　梶家脇水路
文永四年（一二六七年）　出土
一五三×四二

4

横浜市港北区高田三宝寺旧蔵
川崎市高津区久末妙法寺　現蔵
建長七年（一二五五年）初秋
六〇×四〇
主君聖霊出離　往生極楽

中世高田郷は二俣家石大臣家法華堂領、醍醐寺

5

6

（注）鶴見区矢向最願寺　延慶二年（一三〇九）板碑

川和旧在
元徳四年（1332）銘
104×31　完

阿弥陀一尊種子・五輪塔板碑

不明
上七六×三八　下六一〇×四〇
神奈川県横浜市・笠樋稲荷神社蔵 ——→ 地蔵山旧在

『板碑概説』の口絵には中央部の欠失のない拓本が収載されている。現状は蓮座の下から天蓋にわたる一部が失われている。上部に伊字三点つきの荘厳体キリーク、蓮座、その下に天蓋（オン字天蓋といわれるもの）、梵字名号（ナ・モ・ア・ミ・ダ・ブク）と続く。名号の左右には火輪を長くデザインした五輪塔が刻まれる。空・風輪にケン・カン、水・地輪にバン・アが彫られている。火輪にあたるところは、笠と細長い塔身と基礎の三つの形で「ラン」を表現している。下から読むとア・バン・ラン・カン・ケンと大日法身真言となる。五輪塔の特徴などから建治から正安ごろ（一二七五～一三〇三）のものと思われる。『武蔵の塔婆』

横浜市都筑区川和水路の橋に転用
町田市個人蔵
鎌倉市長谷寺現蔵
『町田地方史』

3　この地域における初発期の板碑　鶴見川本流の鴨志田・岡上→渥美焼の分布一致
　長瀞・小川町産の緑泥片岩の流通路と板碑文化→水路＋鎌倉道を通じて伝播
4　長津田　１３０３　嘉元元　１８５　５０　完　　荘厳体を境にして小型化する
5　川和　１３３２　阿弥陀１尊　元徳四　１０４　３１　完　画像板碑は板碑の
　持つ供養塔婆の意味が失われて、小川の橋に転用された例・・・類例忍城つぶて
　現在　鎌倉の薬王寺所蔵　鎌倉市指定文化財・・・板碑の経歴を記す必要性
6　荏田・勝田には１４世紀前半まで板碑が作られていない
　しかし、荏田は清涼寺式釈迦如来像など高い仏教文化が伝わっている

小括1，多摩川・鶴見川流域で最も古い板碑は鴨志田念仏堂寛元二年銘板碑である。
　府中、青梅、大田、品川などよりも古い板碑であることは注目すべきである。
　＊板碑文化を受け入れる武士階級・僧侶・石工の存在、伝播経路、物流経路の存
　在が想定される。：：：鎌倉上の道沿いの町田・府中よりも早い
　鶴見川本流の鴨志田郷に板碑造立文化が伝播　１３世紀に４基造立している
　寛元二年、建長七年（念仏堂）文永七年、正中二年（小金松）
　参考・埼玉県江南町（現熊谷市）に所在する最古の武蔵型板碑　嘉禄三年（１２
　２７）より１７年おくれて板碑造立文化が伝播した。継続して造立している。
　その後鶴見川上流の　岡上で板碑が造立される。
　早渕川沿いにある山田の三宝廃寺建長七年
　恩田川沿いにある十日市場（榎下郷）と長津田郷で造立される。
2，１３世紀の板碑は①鴨志田郷、②山田、③岡上、④十日市場（榎下郷）⑤長津田
　５地点である。・・・板碑文化先進地域
3，板碑→供養塔婆→中世村落の存在・複数の谷戸・低い台地　安定した富裕な村落
4，北よりの鎌倉中の道沿い
5，南北朝、室町期の板碑　一カ所から大量の板碑が発見される・・中世後期の村落
　が発達した地域・・・板碑文化後発地域→鶴見川・多摩川下流域→表吉田・吉田
　（御霊）・上の山遺跡→巡国雑記の道に沿い

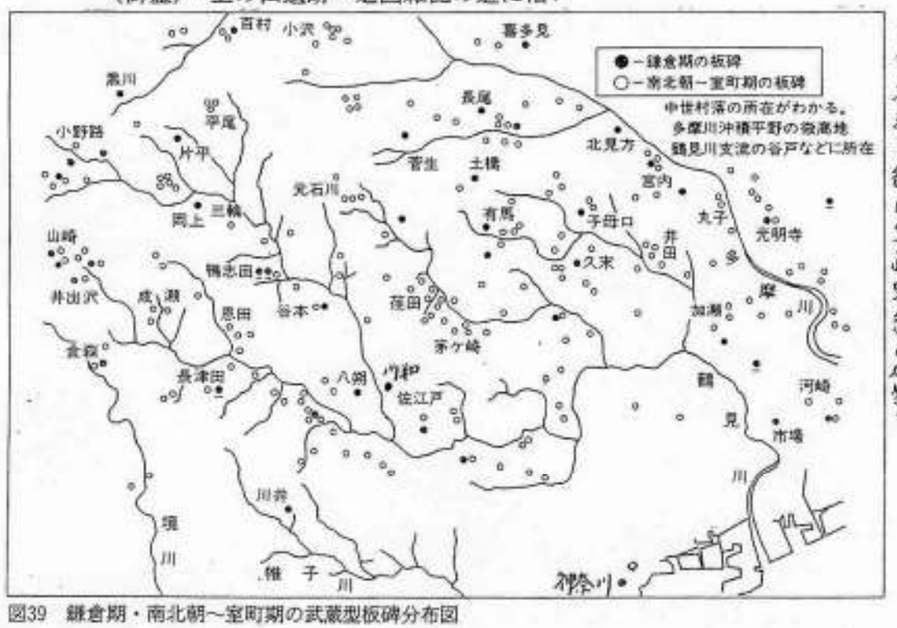


図39　鎌倉期・南北朝～室町期の武蔵型板碑分布図

追記　高田　文保二年銘石幢
出典　横浜市緑区史通史編に加筆　中西作図

No.3

鶴見川流域の初期板碑一覧

	西暦	主尊	年号	高さ	幅	備考	
1，鴨居	１２３９	阿弥陀１尊	延応元	５３	２０	完	林光寺　検討の要有
2，鴨志田	１２４４	阿弥陀１尊	寛元二	１３２	５１	完	蔵骨器　東面　念仏堂
3，鴨志田	１２５５	阿弥陀１尊	建長七	１０９	５４	中部	西見寺類
4，山田	１２５５		建長七	６０	４０	中部	主君銘三宝廃寺旧在
5，岡上	１２６７	阿弥陀１尊	文永四	１４０	４４	完	
7，寺家	１２７０		文永七				寺家は鴨志田郷に属
8，本町田	１２７６	阿弥陀１尊	建治二	７７	２７	完	恩田川上流域
9，寺家	１２７７		建治三				寺家は鴨志田郷に属
10，十日市場	１２８１	阿弥陀１尊	弘安四	９０	２７	完	神明下ラントヴバ
11，長津田	１２９４	阿弥陀３尊	永仁二	５６	２１	上中	
12，長津田	１３０３	阿弥陀１尊	嘉元元	１８５	５０	完	荘厳体
13，上麻生	１３０６	阿弥陀３尊	嘉元四	５９	２１	完	
14，大場	１３０７	阿弥陀３尊	徳治	６６	２３	上中	寺下遺跡出土
15，北山田	１３０８						長泉寺
16，片平	１３０７	阿弥陀１尊	徳治二	５５	２６	上中	
17，元石川	１３１１	阿弥陀３尊	応長元	９７	２５	完	西勝寺
18，谷本	１３１７		文保元				祥泉院
19，新羽	１３１７		文保元				
20，茅ヶ崎	１３１８		文保二	３３	１９	中部	正覚寺
21，佐江戸	１３２３	阿弥陀３尊	元享三	５８	１８	中下	無量寺
22，大棚	１３２３	阿弥陀１尊	元享三	７２	２２	完	龍福寺
23，吉田	１３２７	阿弥陀１尊	嘉暦二	５１	２３	上中	正福寺
24，早野	１３３０	阿弥陀１尊	元徳二	６９	２２	完	
25，川和	１３３２	阿弥陀１尊	元徳四	１０４	３１	完	画像板碑　小川の橋
26，有馬	１３３７	阿弥陀３尊	建武四	１０７	３２	完	福王寺
27，池辺	１３４０	阿弥陀３尊	暦応三	４５	２１	上中	杉山神社
28，恩田	１３５２～５５		文和	３２	２３	中部	家墓
＊　恩田	１３２５		正中二	恩田万年廃寺梵鐘銘			

出典　鈴鹿正和・相沢雅雄「横浜北西部（旧都筑郡）の板碑」『都筑文化』２　１９８２
　相沢雅雄　『長光廃寺』
　坂本　彰　「港北の中世陶器」『調査研究集録』第６冊　１９８９
　『寺下遺跡』日本窯業史研究所　２００３
　『多摩の板碑』町田市立博物館　１９９９
　『横浜市の文化財』　横浜市文化財綜合調査概報１～１１　１９７７～
　渡辺美彦担当　「川崎市所在板碑一覧」『川崎市史資料編』　１９８８
　中西望介担当　「中世の石造物・板碑」『横浜緑区史通編』　１９９３

注　１　鴨居　１２３９　阿弥陀１尊　延応元（１２３９）は検討を要する。
　　２　１３世紀板碑　主尊は阿弥陀１尊高さ約　１４０㌢程度　幅４０から５０㌢程度

矢向　1309　阿弥陀　延慶二　　完　最願寺

No.4

四、鶴見川流域の結衆板碑

118〔新編武蔵風土記稿〕巻之六十一　橘樹郡之四　長尾村

○大節穴谷長尾にあり、内に石像を立つ、長一尺許、（中略）、又延徳年中月待の断碑あり、後に出せり、（後略）

（石碑図絵文）

道善　妙善

源海　彌藤次郎　延徳四年壬子

奉月待供養結衆

道伸　妙林　十一月廿日

妙口　彦四郎

」

1

写真73　阿弥陀来迎画像板碑

（拓本）麻生区　法華寺蔵

長尾

延徳四（1492）

高石

交名有

2

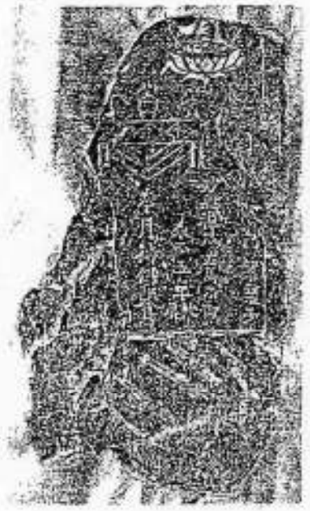


写真72　永正五年銘月待板碑

（拓本）川崎市立日本民家園蔵

金程

3

図45　天文年中銘阿弥陀画像板碑

中川　阿弥陀画像板碑

（1532～1555）

4

図－(6)

黒須田夜念仏供養板碑

紀年銘部分　欠損

新編武蔵風土記稿

古碑一基　北の方田間にあり、恋念仏の碑にして長さ三尺餘、幅一尺餘か則、上に梵字を刻し、中に恋念仏とあり

刹部太郎次郎源次郎下に天文八年亥とあり、

1539

下　欠	上下欠
h 90.5 w 34 t 37 2.6	h 35 w 32.3 t 2.8～3
〃	〃
26	3

上谷本

意味がわからない　田中にあり

〔五三〕

町田市通史編では文明十五年とする

実物に当る必要あり

《阿彌陀》輪座

（月蓮）

文明十六年

野津田

一郎

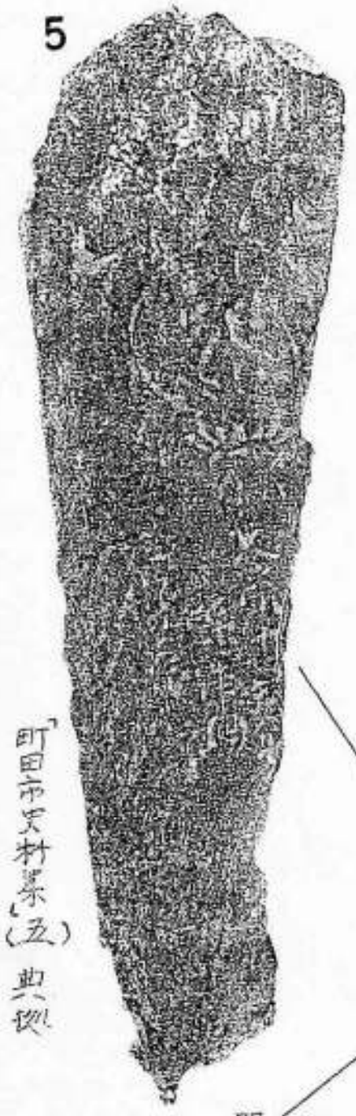
〔太郎カ〕

四郎

文名を根拠とする

〔五三〕

5



「町田市史村墓」（五）史料

・一四八四年

・身部上右端より下端中央部にかけて欠損

・長さ五〇・〇　幅上一五・五　下一一・〇

・「野津田」の書風・刻法は記年と同様

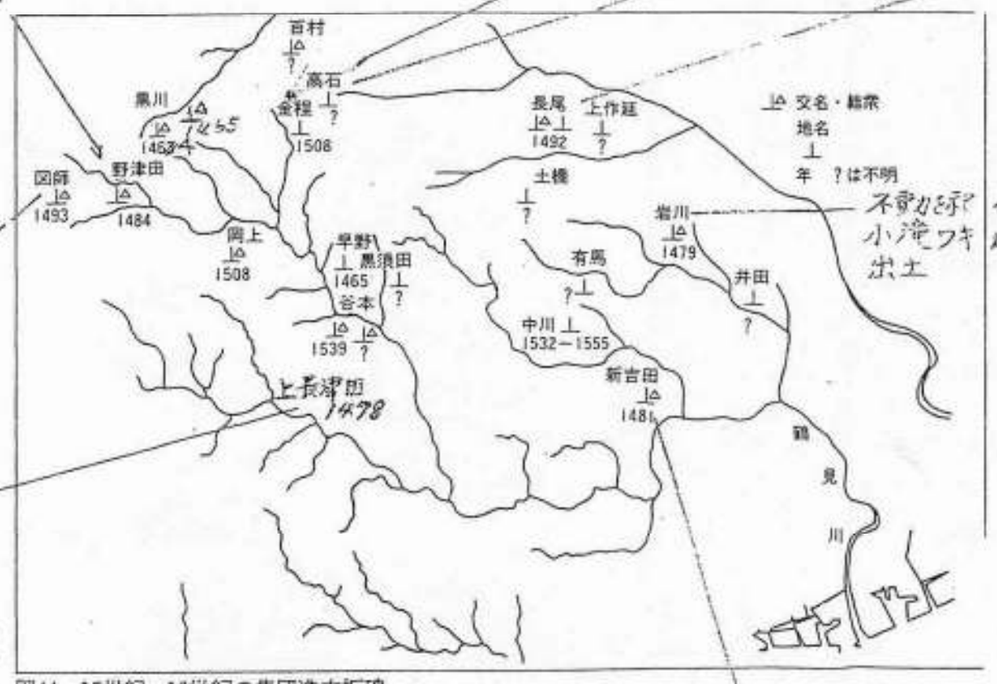


図44　15世紀～16世紀の集団造立板碑

図師・上長津田のこうば

服部清道　板碑概説　典拠

文明十天小春十五日　10/15

「久保常晴　横浜市港北区新吉田町出土の板碑群」

文明十四年（1482）

五、結衆板碑

○○氏(母緑)の結衆(13世紀)から衆(地縁)の結衆(15世紀)

村落的結衆

○性を記さない農耕者(地侍・有力農民)の村落単位の結衆

(イ)千々和到「板碑とその時代」平凡社

○県飯田文夫「武蔵板碑における結衆の変遷」および分類

鈴木家　貝取一丁目

10—18

文明2年(1470)

(注)

旧緑区在結衆板碑は完形のものが無いので理解の一助として多摩市貝取所在の板碑を提示した。

銘文の読みを拓本と対照して欲しい。

無性である事に注意

無性＝平民百姓と言えるか留意

法量	高	119.5
	幅	36.7　37.5
	厚	3.0
備考	『都目録』227・『西島目録』79では、高さを150センチとする。泰登上人の『藁屑』には、文政6年出土の板碑の1枚として、この板碑の図を載せる。	

(画像三尊)　具　文明二年十一月中旬

三　刃　白

(天蓋)

※ (左衛門三郎　平次三郎

供養　孫次郎　平内二郎　彦六

念仏　彦六　小三郎

)　孫二郎

足　庚　敬

花香炉前机

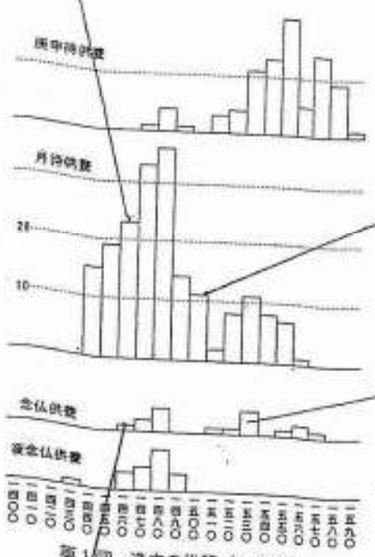
結衆交名

平三郎　孫二郎

出典「多摩市の板碑」

黒川 寛正五(1464)

諸岡 勝「板碑にみる民間信仰」『浦和市史研究』15号



第1図　造立の推移（10年毎）

金程 永正五(1508)

下谷本(みたけ台)寒念仏 天文八(1539)

黒須田夜念仏板碑 紀年銘部分欠

黒川 寛正六(1465) ※初発

五、月待　民俗学的に見ると

つきまち　月待　特定の月齢の夜に人々が寄り合い飲食などをともにしながら月の出を待つ行事。その集団を月待講とよぶ。暦法成立以前には月の盈虧(えいき)で日を数えたので月齢に対する感覚はことに鋭く、日待と並んで民間信仰の重要な領域を構成していた。ただし月の満ちる上弦よりも欠ける下弦に重点がおかれたのは、月影が欠落し月光が薄らぎやがて漆黒の闇に埋没するのを恐れ、ひたすら忌み籠りに徹した原始信仰に基づく。居待(いまち)・立ち待・寝待(ねまち)と並行して十七夜待・十九夜待・二十三夜待が重視された。なかでも二十三夜待が最も普及し、各地に供養のための二十三夜塔碑が建てられている。宿に集まり月読尊の掛軸を祭り供物献燈ののち誦詞をささげて月の出を待つ。物忌み籠居の意が失われた近世には、いたずらに宴遊が中心となったが、それ以前には水垢離をとったり入浴したりして浄衣をつけ参加した。その起源は明確でないけれど日待とともに祭りの古い形態を示す。

(参考文献)　桜井徳太郎「講集団成立過程の研究」

二十三夜待

物忌

○全国各地に分布　○近世の二十三夜塔

○きびしい禁忌

○祭祀の原初的な形態

(イ)桜井徳太郎「講集団成立過程の研究」

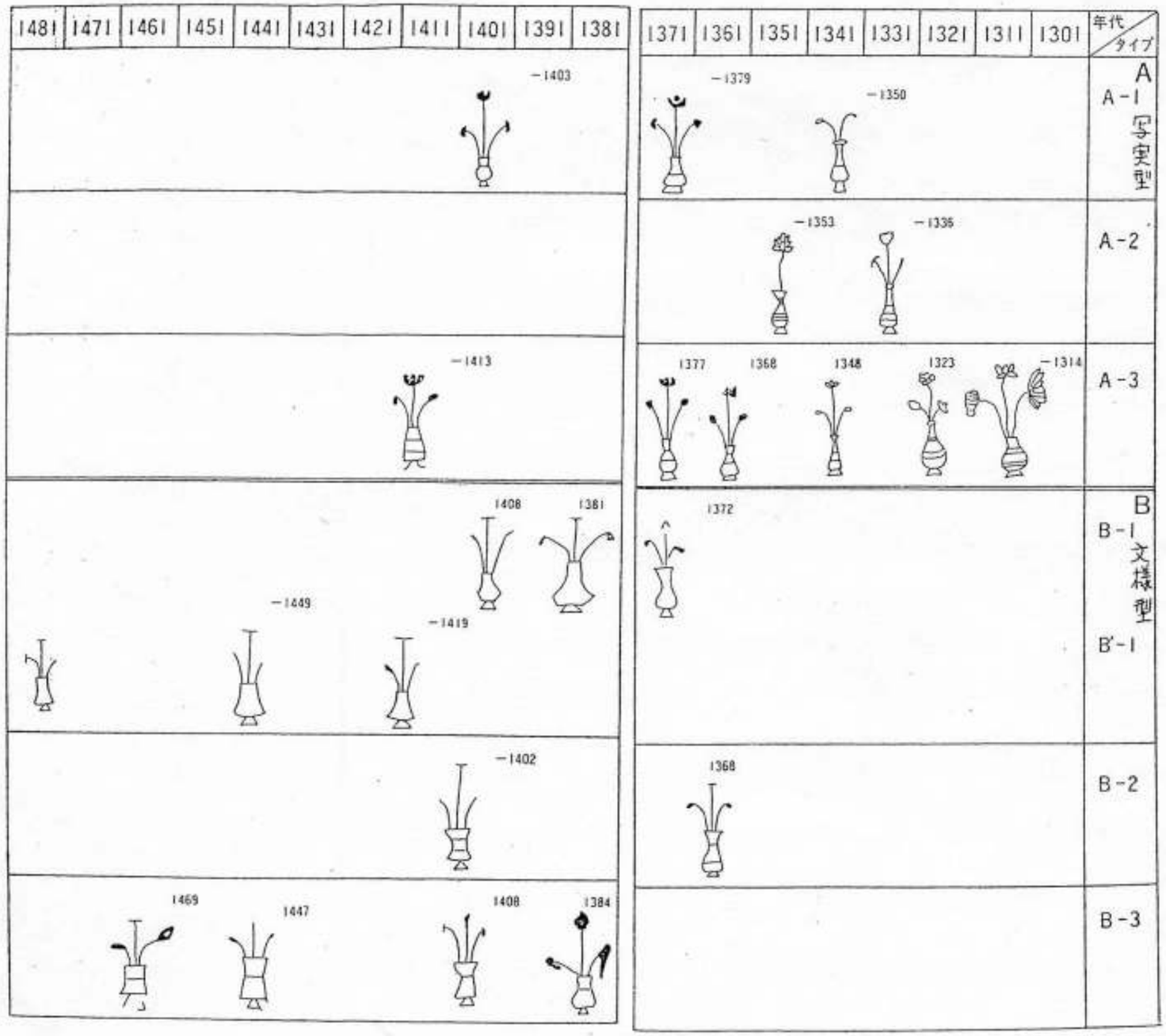
柳田国夫「分類祭祀習俗語彙」

六 板碑の残片 から年代をさぐる

A. 板碑にみえる 花瓶の編年

川崎市域の場合

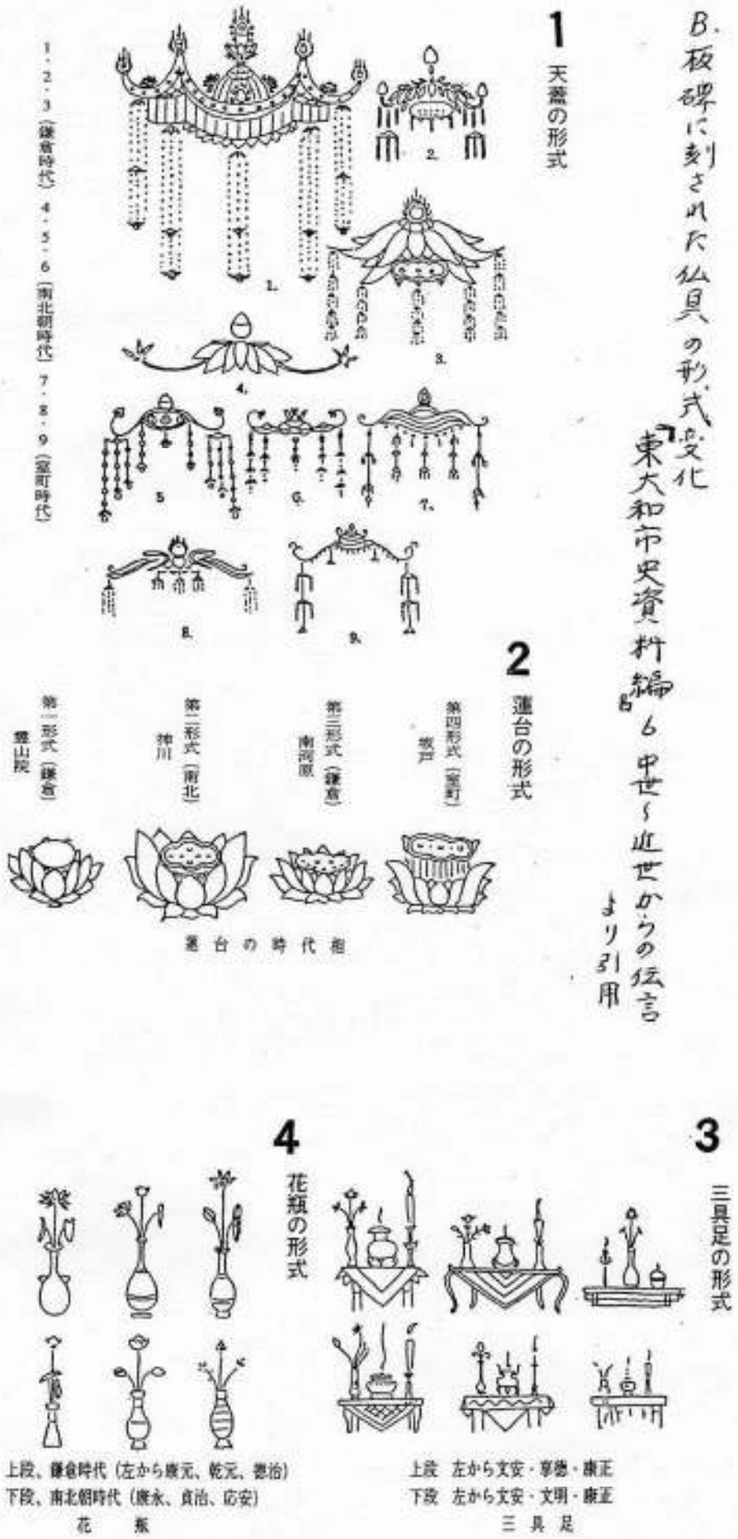
（渡辺美彦「板碑に刻まれた花瓶について」（『かながわ文化財76』）より）



板碑は中世の史料である。しかし完形で残っているものは数少ない。紀年銘が判明しない板碑の残片を活用する方法が試みられてきた。渡辺美彦による「花瓶の編年」はその代表的な考え方である。ここでは川崎市と地域をとり扱っている。地域によって異なっているので、それぞれの地域で編年を作成していくことが肝心である。

B. 板碑に刻まれた仏具の形式変化

東大和市史資料編6 中世～近世からの伝言 より引用



C. 種子・蓮座の時代相

建長八(1256)

鎌倉期 種子は大きく立ち上がった感じで、蓮座は立体的で写実的。力強い印象を与える。

文永八(1271)

正応五(1292)

(種子の先端が蓮座にくいこみ、同じく(イー)の先が翻転している。ていねいな彫り。)

応安四(1371)

鎌倉期のような個性的な印象はうすくなる。

永徳三(1383)

(蝶形蓮座とよばれるこの形式は、南武蔵を中心に、14C後半～15C初と、地域的・時代的に限定して出現する。)

宝徳二(1450)

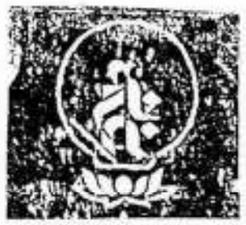
延慶二(1309)

元亨(1321)

(線彫りの蓮座は、鎌倉末～南北朝初に多い。)

文和四(1355)

南北朝期 種子蓮座ともに形が整のって美しいが、極めて形式的な印象を与え、



文正元(1466)

室町期 種子・蓮座ともに形式化、文様化が進み、蓮座の写実性はほとんどなくなる。立体的印象もなく、平板化する。

福徳二(1491)

天文十二(1543)

戦国期 15世紀末からは種子、蓮座ともに一般的には縮小になって、板碑全体の面積に比べて小さいものが多くなる。紀泉板碑などに例外もある。

千々和到『中世石造物調査の手引き』二〇〇〇年七月より

D. 天蓋の形式変化

●図14 八王子市北町 天満宮(康永4年)

●図15 日野市堀之内 延命寺(文明2年)

●図16 青梅市黒沢 関戸院(天文12年)

●図17 調布市博物館(文明3年)

●図9 日野市豊田 大寛寺(延慶2年)

●図10 秩父市南関 地蔵院(元応2年)

●図11 立川市栄町 普済寺(正中3年)

●図12 調布市博物館(建武4年)

●図13 国分寺市西元町 国分寺(応安7年)

県敏夫『多摩地方の板碑』昭和五十五年より

No 8

板碑に見る中世の人々

人物かわさき史話 96

月の出待ちつつ飲食

日本民家園（多摩区枡形）に保存されている板碑片は、中世の村落を考えるうえで貴重な資料だ。

上部が欠損しているが、碑面右上に阿弥陀三尊の一部、観音を表す梵字（ぼんじ）が残っている。碑面には前机、香炉、花瓶が描かれ、「奉月待供養　□□門　袈裟子　妙□禅尼　右馬次郎　永正五戊辰　十一　二十」の銘文が読める。完全な形で残っていれば、高さは約百二十㌢ほどになろう。

この板碑が出土した金程（麻生区）は、宅地化されたが、開発前の景観は鶴見川上流に沿う谷戸田と丘陵部の山林・畑地からなる村落だった。中世古道の伝承や点在する板碑などから中世びとの痕跡がうかがえる。江戸後期には家数十数軒の小村だった。

幽い、中世の関連史料が一点だが、京都・相国寺僧の日記「蔭涼軒日録」に残されている。そこでは、金程は長享二（一四八八）年に寺領になっている。

「金程村は長い間年貢が納められていないので、年貢高が解（わか）らない」という。この村は、領主から年貢の負担ができる独立した村落組織をもつ村と見なされていたのだ。

先の月待板碑に戻ろう。月待とは中世後期から見られる習俗で、月の出を待ちながら人々が集まって飲食をともにし、あるいは祈とうなどを行うものだ。村の「寄合」の役割を併せ持ったものと考えられている。袈裟子、右馬次郎ら四人は村の有力農民だろう。

では、十一月二十日はどう考えたらよいのか。旧暦十一月二十三日は冬至の前後にあたる。十一月二十三日は、いまは勤労感謝の日だが、かつては新嘗（にいなめ）祭で、一年の収穫を神に感謝する村の重要な祭りの日であった。

したがって、十一月二十日も同様と考えてよかろう。永正五（一五〇八）年銘の金程月待板碑から、霜月三夜に右馬次郎ら四人の有力農民を中心に村人たちが遅い月の出を待ちながら寄り合い、神に祈り、飲食をともにして収穫を祝った情景を思い浮かべることができる。

（川崎地域史研究会・中西望介）

◇

次回から毎週水曜日に掲載します。

永正5年の金程月待板碑拓本（「川崎市史・通史編1」から）

神奈川新聞 04・3・13

近世初期墓塔

川崎・横浜北部地域の板碑の最末期

天文年間（16世紀中頃）

個人の法名刻す一墓標化

近世初期墓塔

元和八年（1622）

※50年以上の空白

※石材の変化　緑泥片岩から安山岩

※板碑型は板碑の継承してるか

※木の年塔婆 ——→ 木材加工技術の進歩

潮音寺　笠原家墓地　板碑型双碑墓塔
中央の墓塔に延宝四年（1676）の銘がある

「川崎市内における近世初期墓塔について」
—多摩・麻生区を中心に—
川崎市文化財調査集録 31 1995
中西望介

表1　多摩・麻生区における近世初期墓塔の形態

年代	宝篋印塔	五輪塔	一石五輪塔	板碑型	板碑型連碑	光背型	角柱錐型	笠塔婆型	無逢塔	櫛型	合計	逆修	回忌供養
1611～20 慶長16～元和6							1(1)				1(1)		
1621～30 元和7～寛永7	2	1	1	2(2)							6(2)	1(1)	2(1)
1631～40 寛永8～寛永17		2	1	3							6		2
1641～50 寛永18～慶安3	1	8	4(1)	12	2	1		1(1)	1(1)		30(3)	1	1
1651～60 慶安4～万治3	3	2		13(1)	1	4				1(1)	24(2)		
合計	6	13	6(1)	30(3)	3	5	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	67(8)	2(1)	5(1)

注　1　板碑型・板碑型連碑で二人の戒名を刻む場合は、年代の新しい方を用いた。
　　2　（　）内の数字は旗本の墓塔を表す。例4（1）は全体が4基　この内1基が旗本の墓塔をあらわす。

表からわかること

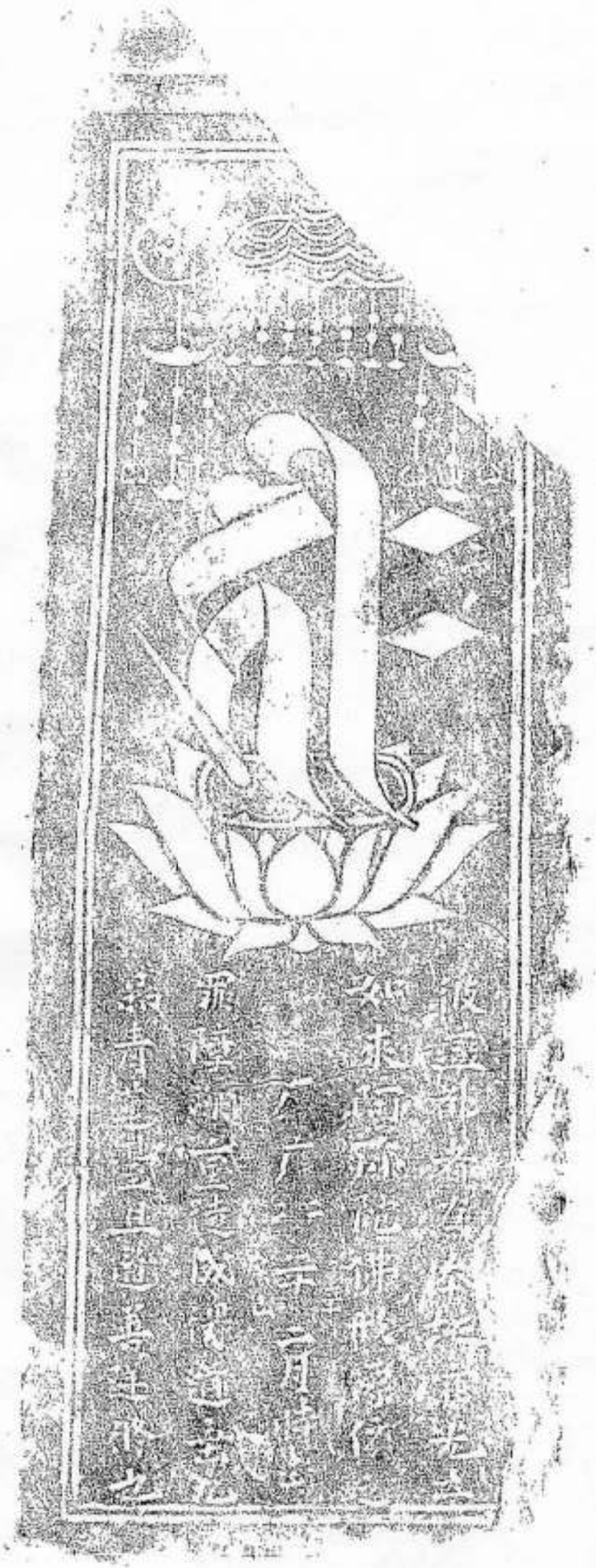
1　初発期（1611～30年）は旗本と北条氏旧臣の旧家の墓塔である。
2　旗本が多様な形態の造塔文化が伝えたことがわかる。また、旗本が逆修供養塔・回忌供養塔をはじめてたてる。
3　逆修・回忌供養の墓塔は寛文期を境に減少する。
4　中世の造塔文化の伝統をひく宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔の造立が盛んであるが、寛文期に入ると見かけなくなる。
5　初期墓塔は形態や造立主旨において中世の伝統が残っている。

表2　基準となる近世初期墓塔　（番号は一覧表の番号）

	年代	形態	所在地		造立主旨	番号
1	元和8年（1622）	板碑型	修廣寺	長瀬家墓地	旗本前場勝秀供養塔	2
2	寛永元年（1624）	板碑型	浄慶寺	歴代住職墓他	旗本三井家逆修供養塔	3
3	寛永12年（1635）	五輪塔	広福寺	横山家墓地	三十三回忌供養塔	9
4	寛永17年（1640）	宝篋印塔	本遠寺	小金井家墓地	七回忌供養塔	12
5	寛永19年（1642）	五輪塔	寿福寺	板橋家墓地	逆修供養塔	20
6	寛永20年（1643）	五輪塔	広福寺	木下家墓地	十三回忌供養塔	23
7	万治元年（1658）	櫛型	浄慶寺	歴代住職墓他	旗本三井家供養塔	64
8	寛文3年（1663）	光背型	光明院	歴代住職墓他	旗本河野通利三十三回忌供養塔	71
9	寛文4年（1664）	板碑型	東光院	山田家墓地	逆修供養塔	72

・造立階層　旗本・旧家（有力農民・後北条氏旧臣といわれる土豪）
・石材・形態・大きさ
・墓地の景観

（注）現在ある墓地景観は江戸中期以降墓石が林立する



高津区千年 暦応 四年（一三四一）

「彼率都者為本地寂光土
如来阿弥陀仏形像依之
暦応二年二月時正
罪障深重徒成得道乗九
品青蓮台且道善逆修也」